平成一八年度東亜同文書院記念基金会記念賞・奨励賞の推薦文

平成一八年一二月八日に表題の授与式が東京の霞山会館で行なわれ、テレビ宮崎が記念賞、成瀬さよ子氏が奨励賞を受賞しました。両者の方々への推薦文をご紹介します。

推薦の辞

東亜同文書院記念賞

テレビ宮崎殿

東亜同文書院大学四一期生　高瀬恒一

テレビ宮崎におかれては「新民先生――ふりかえりみて悔いなき時なり――」という番組を制作放映されました。平成一八年（二〇〇六年）五月三〇日深夜放送が最初だったと思います。残念ながらこの首都圏で

は放送されなかったのですが、東海地方では先般深夜放送されたそうで、愛知大学のある教授の方がそれを見て大変感動したということを伝え聞きました。

私がこの番組の企画を知ったのは本日ここにお出になっているテレビ宮崎の馬原さんから、実はこうこういう番組を企画しているが、新名さんという東亜同文書院出身者のことを知っている方がいないか、或いは何らかの資料はないか、というメールをいただいたのが最初でした。愛大OB山下さんからの紹介でした。私は、書院大学史のなかに新名君が剣道部で活躍したという記述があることを見つけ、そのコピーを送ったりしたことがあります。そのほかにはお役に立つことができなくて申し訳なく思っております。

この番組のねらいとか、制作過程でのご苦労とか、詳しいことはこのあと、テレビ宮崎の方からお話があると思います。新名君の名前がどうして浮かんできたかなど大変興味あることも聞けるのではないかと思います。

それはさておき私が感じたのは、これはひとりの日本人青年のことではありますが、そのルーツを辿ると、そこには彼が教育を受けた東亜同文書院という特殊な教育機関があることを発見し、それを掘り下げたことであります。

新名君があの厳しい戦時下に中国人労働者を親身になってかばったことは、大変に勇気がいることであります。勇気なくしてはなしえないことであります。とはいえ身近に中国人たちの窮状を見て、新名君と同様の心情に駆られるのは東亜同文書院に学んだ者共通のことではないでしょうか。

戦後、日中友好という言葉が生まれました。しかし東亜同文書院の教育や伝統はそれと同じレベルではな

いと私は思います。中国革命の父孫文を身命を賭して支えた大先輩山田良政・純三郎兄弟にみられるように、中国国民の憂いをわが憂いとする、そういう精神であり伝統であります。日中関係の現状を見る日本人・中国人の大多数にとっては、あの戦争の強烈な認識が頭を占め、まさか一〇〇年前、一九世紀から二〇世紀の半ばにかけて、そういう教育をした日本の学校が上海にあったとは思いもよらないことに違いないでしょう。

テレビ宮崎さんがここに光を当て掘り下げようとしたことに私は深い敬意を表します。

伝え聞くところでは、取材対象の人物の多くがすでに世を去り、かつまた制作費用の制約もあり、取材には多くの困難があったようであります。その困難を乗り越えて制作放送されたこの番組に対し、外部の有識者から成るテレビ宮崎の番組審議会では、

・槇峰鉱山のことは知っていたが、一方でこういう方が宮崎にいらしたことはとても嬉しい。
・こういう偉人がいらしたことを広く県民に伝えるためには、もっといい時間があったのではないか。
・埋もれかけた素材を取り上げていて、これこそメディアの良心だと思った。今考えなければならないテーマを与えてくれた。
・日中の共存共栄を初志貫徹した人柄が十分に表れていた。勇気ある行動は心打つものがあり、若い人たちにぜひ見て頂きたい。

などの意見が出たことがインターネットに載っております。

テレビ宮崎殿に対してぜひ東亜同文書院記念賞を贈っていただきたく推薦申し上げた次第であります。

推薦の辞

東亜同文書院奨励賞

成瀬さよ子殿

東亜同文書院大学四二期生　小崎昌業

成瀬さよ子さんは、愛知大学の図書館に司書として長く勤務しておられる方であります。成瀬さんが愛知大学図書館に入られたのはまだ愛知大学の歴史が比較的浅い時期であったろうと思われますが、成瀬さんは、その愛知大学に中国関係の図書や資料がいかに豊富に存在するかに驚き、さらにそれらに対する学外の研究者の関心が高いことにも驚いたそうであります。

そしてこれらの豊富な図書や資料が東亜同文会の旧蔵書すなわち霞山文庫であること、今もなお東亜同文書院の卒業生やご遺族が愛知大学図書館所蔵のこれらの資料に深い関心を寄せておられることを知ったそうです。

ではその東亜同文書院大学というのはいったいどういう学校なのか。またその大学の志が愛知大学に承継されているということはどういう関係なのか。そのことに成瀬さんは大きな関心を持ち、ぜひそれらを明らかにしたいと考えたそうです。

そしてまず手始めに東亜同文書院生たちが残した大旅行誌の目録作成にとりかかられました。一九〇七年の第五期生から一九四三年の第四〇期生に至る延べ二七〇〇名余りの分をリスト化したとのことです。これ

は容易ではない大変な作業です。

その作業からさらに進んで今回の東亜同文書院関係目録に着手されました。それは膨大な資料を時系列的にあるいは項目別に整理する作業でさぞかし大変であったと推測されます。そしてさらに成瀬さんは、海外の研究者の東亜同文書院に対する関心はどうであるかを確かめるためにアメリカの有名大学五校を訪ね視察された。二〇〇四年九月一〇日より一ヶ月間、ハーバード大、プリンストン大、ミシガン大、カリフォルニア大バークレー校、ハワイ大マノア校の各校を訪ね視察と意見交換を重ねられました。それにより海外研究者の東亜同文書院に対する関心度が極めて高いことを身をもって体験したそうであります。また、東亜同文書院から戦後愛知大学に引き継がれ完成した中日大辞典はアメリカの諸大学でぼろぼろになるまで使われていることを目の当たり見てきたということも聞いております。その辺のことはあとで成瀬さんご自身から詳しいお話があると思います。

受賞の挨拶をする成瀬氏

私が感銘を受けたのは、成瀬さんが単に膨大な資料を整理し目録化しただけではなく、東亜同文書院の志、つまり書院の建学の精神が愛知大学に受け継がれ二一世紀に向かって発展しつつあることを実証的に確かめるという明確な目的意識を持って作業を続け成し遂げられたことであります。これは誠に有意義な作業であり、その業績は高く評価されるべきものと考えます。

この目録は、これからの東亜同文書院についての内外の研究者にとって大きな武器となり、研究の進展に大きく寄与するであろうことは疑いありません。

成瀬さよ子さんに対し本日東亜同文書院奨励賞を贈っていただけたことを大変嬉しく感じる次第であります。成瀬さん、どうか今後ともお元気でご研鑽を続けて下さい。